

現代社会と仏教

愛知学院大学教授

引田 弘道



一、現代社会の抱える様々な問題と仏教

現代日本において、私達は様々な社会問題に直面している。新聞紙上でもよく目にするのは、家庭内暴力(DV)、保険金詐欺目的の殺人事件、

若者の暴走とそれとは逆の家庭内引きこもり等である。国外に目を転じれば、昨年九月のニューヨーク世界貿易センターでの事件以来、キリスト教社会とイスラム社会との亀裂がどんどん深刻化している。最近、インドネシアのバリ島で

起こった爆弾テロは、西洋化された観光地に対するイスラム原理主義者の反発により引き起こされた、との見方が強い。この島はイスラム国インドネシアにあつて唯一ヒンドゥー教を信仰しており、「神々の島」として日本でも人気の高い地であつたため、テロのショックは想像を絶するものであつた。

このような現代社会の抱える問題に仏教は何かの解決の糸口を提供することが出来るであろうか。葬式・年忌法要といった葬送儀礼を布教活動の中心とする現在の仏教がこのような社会問題に取り組むことはたして可能であろうか。特に現代日本で大きくクローズ・アップされている心の問題を、仏教は何らかの形で解決することが出来るか。そのためには今一度仏教の原点である釈尊の生涯を再考してみる必要がある。

二、釈尊の出家の動機と悟り

釈尊は二十九歳のとき、愛する妻と子を残して出家した。彼の出家の動機は「生死の克服」と一般的に考えられている。四門出遊の出来事は、人間の必ずたどるべき老・病・死と、沙門という俗世間を離れた苦行の実践者を説いている。沙門こそ釈尊が選択した道であつた。これは道元禪師も「生を明らめ、死を明らむるは、仏家一大事の因縁なり」と強調されている。釈尊は六年間、断食などの激しい苦行の後、苦行自体の無益さを悟り、禪定を中心とした、世俗の生活と苦行の中間の実践である「中道」を標榜した。禪定によつて自身のうちに湧き出る智慧をもつて現実存在をありのままに見ること(如実知見)こそ、自己のうちなる葛藤を鎮め真実の自己を実現する手段と考えた。つまり生死の克服は禪定と禪定によつて生じる智慧をもつて

完成されたのである。釈尊の悟りは縁起の法とするのが一般的であるが、それは智慧をもって如実知見を實現し、人間の本質的無知である無明を滅却すれば、それを原因とする人間的苦しみは自然となくなるというものであった。

以上のような釈尊の思想は、彼の最初の説法である初転法輪の内容である四聖諦の道諦にいう八正道によく示されている。つまり釈尊の教えを信奉し、それに従った生活を行動・言葉・心の三方面から実践し、禪定を修すれば、仏教の理想の境地である滅諦が現成するというものである。仏の教えを信じ、ただひたすら正しき生活をおくり、禪定に邁進することこそが、生死を超越する方法であると説いている。道元禪師も「生死の中に、仏あれば、生死なし。但生死、即ち涅槃と心得て、生死として厭ふべきもなく、涅槃として欣ぶべきもなし。是時、初めて生死を離るる分あり。」と、生死と涅槃とを両

極にあるものとせず、一体のものとして蕭々と修行を続けることを説いておられる。釈尊の實踐修行は出家者を対象としたものであったが、在俗の生活を送る人も仏・法・僧に帰依し、報いを受けるまでは決して止むことのない罪業の恐ろしさを信じて五戒を守る規則正しい生活を送れば、煩惱を完全に滅しもはや再生しない阿羅漢といった修行僧の目的は達成できないまでも、功德を積んで神として生まれる果報を得ることが可能だとされる。つまり修行僧と在俗者とはその最終目標にレヴェルの違いはあるものの、それはそれとして納得できるものである。道元禪師も、在俗者は自らの罪業を懺悔すれば、仏の功德の力で罪を軽減し、あるいは清浄となることさえも可能であると説いておられる。

三、心の病の治療と日々の生活

このように釈尊や、道元禪師は、生死と涅槃とを相対化せず、それらにとらわれずに、三宝に帰依し、毎日の生活を一生に一度しかないと大切に過ごすことが一番肝要であると強調している。道元禪師も「設ひ百歳の日月は、声色の奴婢と馳走すとも、其中一日の行持を行取せば、一生の百歳を行取するのみに非ず、百歳の他生をも度取すべきなり。」と説いておられる。

ところで、現在の日本社会では家庭内暴力、心身症といった「心の病氣」、あるいは病氣までいかなくても「癒し」を求めることが一種の流行のようになってきている。筆者が勤務する愛知学院大学には文学部心理学があり、以前からその人気の高さは群を抜いていたが、四、五年前に大学院が日本臨床心理士資格認定協会より「臨床心理士」受験資格取得指定校（一種）に認定されていらい、大学院、学部とも希望者が殺到している。これは単に就職に有利という理由ば

かりではなく、人間の心理、特に「自己の心の分析」に興味を抱く学生が増えてきたことに起因しよう。中部地区でもこの受験生の要望に応えるかたちで、人間学部、社会心理などの名を冠した学部、学科が増設されており、愛知学院大学でも、平成十五年度より文学部心理学を改組して、心身科学部を新設する予定である。

これは人間の心と身体の両面を科学的に考究するものであり、日本でも珍しい学部となろう。

ただ、人間の心理は、心理だけに焦点をあてて研究したとしても、はたして解明され得るであらうか。人の心は「心、ころころ」と言われるくらい、常に変化し捉えようのないものであり、他人はおろか本人さえも理解し難く、制御し難いものである。釈尊は「五蘊無我」を説くなかで、この五を物質（色）と、心作用の受・想・行・識に分類したが、ただ心の分析ばかりに頼るのではなく、正しい生活と、如実知見と

いう智慧を産み出す禪定という実践とを強調した。つまり「心とは何か」とらわれた偏狭な態度は無意味で無益としたのである。アトピーのような皮膚病を治療するのに、患部に薬を塗るだけでは完治しにくく、むしろ身体全体の悪気が皮膚に現われたと考えて、身体全体を治す対策のほうが回り道でも完治に至るように、自分の心が分からないからといって心理学をいくら勉強しても、理解出来ないままで終わるのではなからうか。むしろ心にとらわれず、心を放下することこそ必要なのではなからうか。筆者は心理学という学問自体を無益だと言うつもりはないが、心理学を勉強さえすれば自己が救われるという考えには疑問を呈したい。

四、正しい生活とは

釈尊や道元禪師が出家至上主義者であり、在

家信者を一段低く見ていたという説もあるが、筆者はそう考えない。確かに釈尊は家庭生活を放棄して苦行の道に入ったのであるし、道元禪師も釈尊の修行主義を追体験する立場をとられた。しかしながら両者とも在家信者を排除したのではない。禪師も「仏祖憐みの余り、広大の慈門を開き置けり。是れ一切衆生を証入せしめんが為めなり。人天誰か入らざらん。」と明白に仏の慈悲の広さを説いておられる。そして在俗信者たちは「我昔所造諸悪業、皆由無始貪瞋痴、從身口意之所生、一切我今皆懺悔」と日々の自ら犯した罪を反省することこそ、彼らが救われる方法とされている。ここで重要な点は、二つある。一つは在家信者が仏・法・僧の三宝に帰依していること、つまり仏教の説く教えが彼らにとって信用に足る倫理規定であることが定着していること。もう一つは業と輪廻との不可分性である。人間の犯した悪業はたとえその人

間が死んでも消滅することはない。その悪業の報いを受けるまで決してなくならないのである。人はその死をもって終結するのではなく、悪業が残っている限り未来永劫輪廻し続ける。

ところで現在の社会状況を見ると、拜金主義は横行しているものの、仏教の倫理規定は意外なほど信用されていない。摂律儀戒、撰善法戒、撰衆生戒の三聚浄戒や、不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不酤酒戒、不説過戒、不自讚毀他戒、不慳法財戒、不瞋恚戒、不謗三宝戒の十重禁戒の思想が我々に定着しているとは到底言えない。江戸時代まで日本人の精神的支柱であった儒教思想や仏教思想は、明治になりヨーロッパの合理主義が入ってくると、だんだん弱まり、戦後アメリカの文化や思想が横行するに連れ、江戸時代までの精神文化は完全に忘れ去られてしまったと言えよう。だからまず我々は忘れ去られてしまった、布施・愛語・利行・

同事という菩薩の誓願に代表されるような他者を思いやる仏教精神を思い起こす必要がある。他者との競争に疲れ果てた現代人にとって、他者を愛する気持ちを再び取り戻すことが、回り道ながら一番の心の救いになるのではなからうか。このような仏教思想を社会的に喚起することは我々仏教に携わる者の使命であろう。

次に必要なのは規律正しい生活である。これは既に心身症の治療として寺院での集団生活の効果唱えられているが、そこまでいかなくても個人で規則正しい生活が無理ならば、何らかの形の施設で集団生活を送る必要がある。現在末期医療の一環として、キリスト教ではホスピス、仏教ではヴィハーラの重要性が叫ばれているが、それを心の病に苦しむ人たちに適用することである。そこでは仏教精神のもとに集団で規則正しい生活を送ることにより、彼らの心のケアをはかっていきたい。彼らはもちろん

修行僧ではないのだから、苦しい修行をする必要はないし、彼らが望めば朝職場に向かい夕方帰宅することも可能である。他人を慈しむ気持ちをもって自己の行為を反省することを毎日繰り返し、皆で助け合う互助の生活を送ることこそ、彼らの傷んだ心を治すことが可能になるのではなからうか。そのような僧侶と臨床心理士とが一体となつた仏教施設が出来ることが今一番望まれているに違いないと、筆者は確信する。

